

身体に刷り込まれた水の節約

小泉 和子

Written by Kazuko Koizumi

水難の相

私は子供の時、占いの人に「水難の相がある」といわれたことがある。これがずっと気になっていたが、別に水難事故に遭うこともなく過ごしてきた。だがある時「そうだ、水難は水難でも水に苦勞する方の水難だったんだ」と気がついた。

まず最初は、戦争中、疎開していた鶴見の山の中である。昭和二〇年五月二十九日の横浜大空襲で焼け出され、親戚の農家の牛小屋を借りて、改造して住んでいたのだが、もともと牛小屋だったのでもちろん井戸などない。このため母屋である親戚の家の井戸からもらい水をしていった。水汲みは主に長女の私の役目、焼け出されてしまつてバケツもなかったので、納屋から探し出した古い水桶を借りて、天秤棒で担いで運んだ。牛小屋のあった場所は、母屋からかなり離れた足場の悪いところにあつたので、六年生とはいえ小学生の私にとっては重労働だった。雨の日など、草履―靴もなくして手製の草履を履いていた―が滑りやすく、うっかりすると尻餅をついてしまい、水はこぼす、服はびしょぬれ、泥だらけ、ということになってしまった。風呂はドラム缶風呂だったが、これも水を運ぶのが大変だった。

戦争が終わり、東京に戻った。大田区の羽田に工場を改造した家を借りることができたのである。だが、またもらい水生活になってしま

った。もともと工場についていた水道管を使ったのだが、錆びていて、最初こそちよろちよろと出たが、やがてまるっきり出なくなつてしまった。やむなく五〇メートルほど離れた隣家の水道から水を汲ませてもらうことになった。バケツは何とか手に入れたが、今度は敷地が瓦礫だらけで、ものすごく歩きにくい。ただ唯一幸いだったのは、隣のおばさんが親切だったことである。裏口を開けて「お水いただきませう」と声をかけると、いつでも「どうぞ汲んでってください」といつてくれて、ほんとにありがたかった。

ある時、水道の蛇口から水がジャージャー出ている夢を見たことがある。「あら、ほんとには出るんじゃないの」と思つて喜んだら目が覚めた。この夢はいまでも忘れない。

昭和二六年、今度は同じ大田区だが鶴の木に引っ越した。前年にはじまつた住宅金融公庫の融資を受けて小さな住宅を建てたのである。ところが、ここも畑だった土地を借りて建てたため、水道は引けてないし、高台のため深井戸を掘らねばならず、我が家にはその余裕がなかった。またまた地主の井戸からのもらい水である。このときは家族六人に下宿人も二人置いていたから、勝手用の水だけでもかなり必要で、その上、当時は下宿人の洗濯もしてやっていたので、その水も要る。これを何年やつただろう。このころは夢も見なくなつてしまった。

やがて私は高校を出て就職した。私も若干のお金が出せるようになったのでそれを足し前にして井戸を掘った。ポンプ井戸だったが、こ

つきんごつきんと漕ぐと、ざーざーときれいな水が溢れ出す。涙が出るほど嬉しかった。夏など、暑い外から帰ってさぶさぶ顔や手足を洗う時の気持ちよさは忘れられない。

昭和三四年、二五歳の時、結婚して家を出た。近くの米屋の倉庫の二階を借りた。ところがまたもやもらい水になってしまったのである。二階まで水が上がらないので屋上タンクがつけてあったのだが、水が濁ってオレンジジュースのような色である。家主の米屋も未亡人で直してくれるだけの余裕がなく、自分の家の水を使ってくれという。倉庫の二階なので階段が狭くて急で、水の入ったバケツをあげるのにほんとに困った。洗濯は洗濯機を外に置いて、米屋の水道からホースで引いて使った。

昭和三八年、オリンピックの前年、やっと自分の家を建てた。水で懲りているので不動産屋を通して売り主である前の住人の水道事情を確認してもらった上、自分でもわざわざ検分した。「水道は出ますよ」といって、そのときは出たのだが、いざ古屋を壊す段になると、またまた管が錆びてしまっ出てこないことがわかった。いんちきをされたらしい。どうしてこう水にたたられる運命なのかと、つくづく嘆きたくなった。私の家は私道の奥なので水道を引くには五〇メートルも引いてなくてはならない。仕方がない、建物の方は質を落として、水道を優先した。

こうして一〇代から三〇歳までの約二〇年間、水に苦勞した。そのせいか水への憧れが非

常に大きい。町中でこんこんと水が湧いていたり、家の中にまで川水を引き込んでいたりするテレビを見ると、嫉妬さえ感じてしまう。一方、アフリカなどの水のない地域、泥水を汲んでいる様子など見ると、自分が陽に灼かれて泥の井戸から水を汲んでいる様な気になって苦しくなってしまう。気の毒で正視してられない。

あのころとくらべたらいまのくらしは天国である。洗濯は全自動洗濯機、便所は水洗、それどころかウォシュレットまでついている、浴室にはシャワー、何しろ流しの蛇口からお湯さえ出てくるのだから、嘘のようだ。

水回りの歴史

しかし水回りがここまで来るまでには日本人全体にとっても長い長い歴史があった。

まず流しである。いま台所に流しのない家はないが、台所に流しがついたのは江戸時代からである。台所は火だけで、水場は別になっているのが一般的であった。川、湖、池、泉、湧水、あるいは井戸が給水源でもあり、同時に流しでもあった。このため、野菜や魚を洗ったり、洗濯したりするには川や池まで持っていくって、飲料水だけ容器に汲んで住まいまで運んできた。掛樋で水を引いてくるということもあった。



鎌倉時代、大きな寺院に設けられた簀の子の流し(『暮郷絵詞』)

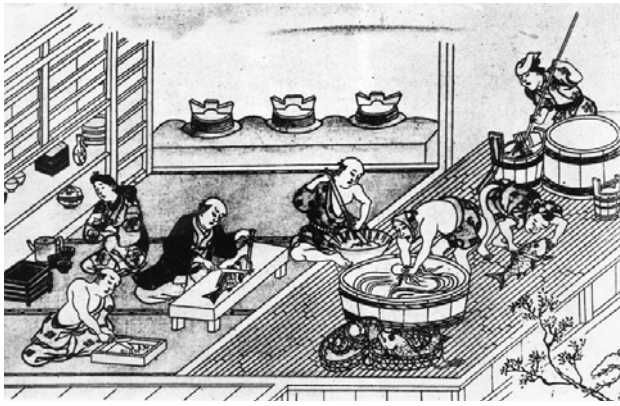
たが、ごく一部だった。

これが鎌倉時代あたりから変わってきて、簀の子床の流しが出現した。土間の上に簀の子床を張って、その上で洗う物をする、汚水は床下に垂れ流しである。しかしこうした流しは大寺院か有力武士の家だけだった。

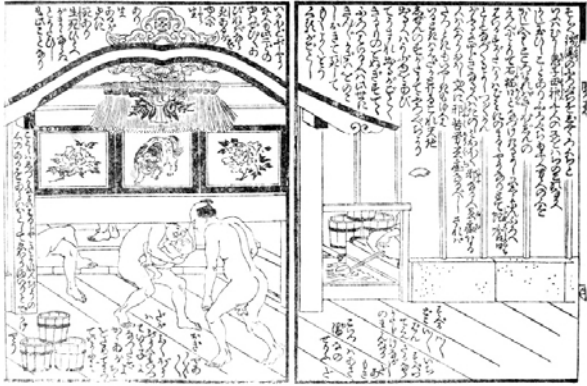
このタイプの流しは江戸時代まで続いていたが、一方で江戸のような大都市では、井戸が給水の中心となった。井戸には以前からの地面を掘った井戸のほか、水道の水を溜めて汲み上げる上水井戸ができた。これは神田上水とか玉川上水の水を水道で市内に引いてきて、各町の

通りの所々に設けた溜枡に一旦溜めて、ここから汲み上げるもので、屋外にある共同で使う井戸と、溜枡から伏樋で各家まで導くものがあった。

これによって家の中に流しが設けられるようになったが、これは富裕な家とか大きな料理屋のようなところで、庶民層は台所の土間に箱流しを据えて、水は共同井戸から汲んできて、水かめや水桶に入れて使っていた。しかも排水はあいかわらず不備で、外のどぶに流し込むだけだったから、裏長屋など、路地に汚水が溢れ出し、これがさらに井戸に流れ込んで伝染病流



江戸時代、遊郭の厨房に設けられた簀の子の流し。井戸もある。
(菱川師宣「吉原の絵」)



江戸時代の銭湯 ザクロ口と呼ぶ入り口をくぐって入ると中に湯ぶねがある。(『賢愚漢銭湯新話』1802)

の昭和三〇年代以降である。

風呂もまた、家庭で設けられるようになるのは昭和三〇年代以降である。それまでは都市ではもっぱら銭湯だった。江戸時代からは、銭湯が庶民向けの沐浴施設となるが、当時の銭湯は、蒸し風呂と水風呂の折衷だった。浴槽は壁で囲まれ、出入り口も屈んで入るもので、中は狭くて暗く、湯は腰までしかなかった。燃料と水を効率よく利用するためである。

このタイプの風呂は家風呂にもあり、有名なものでは佐渡のおろけ風呂や彦根の桶風呂がある。おろけ風呂は、釜で沸かした湯を湯桶の

行の原因になるということもしばしばだった。

近代水道が敷設されるようになるのは明治に入ってからである。東京、大阪、神戸と、大都市では順次敷設が進んでいった。しだいに蛇口をひねれば水が出るようになっていった。排水の方も流しに管を直結して、床下に敷設した土管で道路のどぶに排水するシステムが一応できたが、本格的に整備されるのは、第二次大戦後の



外国人デイクソンが描いた彦根の桶風呂
(『外人の見た幕末明治 初期日本図会』春秋社)



彦根の桶風呂



佐渡のおろけ風呂

中に三〇センチほどの深さまで入れ、そこに小さな腰掛けを置いて乗り、土間の梁などから荒縄で吊した筵の蓋を中から引き下ろして被せ、じつとしゃがんで蒸される。桶風呂は五右衛門風呂との折衷で、上を鉄板で塞いだ土竈の上に桶が乗っている。桶はピア樽形で、上が塞いであり、桶の真ん中に小さな片開き戸の出入り口がある。底は竈の鉄板なので、直接触れると熱

いたため簀の子が敷いてある。簀の子すれすれに水を入れて下から焚き、中に入って戸を閉めて、蒸されるのである。どちらも身体を洗うのは外に出てである。

田舎では風呂のある家が順番に近所の人を入れることも多かった。そんな風呂でも湯がたつぷりあるなどということは少なく、「あそこの湯は首までだった」というのでよく聞くと首は首でも足首だったという話があちこちに残っている。

私自身も若い頃、経験している。昭和二七、八年頃だったと思うが、信州の農家に泊まった時である。風呂に入れといわれて、風呂場に入って覗くと、底が見えないくらい濁った湯が、桶の半分も入ってない。変なおいもするので、入らずに出てきた。

このため昔は何処の家でも、よく盥^{たらい}で行水をした。これも盥一杯のお湯で家族みんなが汗を流すのだから、ときどき差し湯はするのだが、それでも終いには、すっかり汚れてしまった。

身体に刷り込まれた水の節約

ついこの間まではこんなだったのである。日本中の、誰でも、何処でも、人は水を大切に使った。

明治四三年生まれの亡母のしぐさを見て、い

つも感心したのが水の使い方だった。風呂に入っても、洗面器いっぱいのお湯で顔から背中から足まで身体全体、すっかり洗ってしまう。決してお湯を換えたりしないのだが、それでもちゃんと洗えている。若い時は髪を洗うのも釜に湯を沸かして大きな洗面器で洗っていたが、長い髪を飯炊き釜一杯の水で間に合わせてしまった。

盥で洗濯しても、二、三回の濯ぎで水がきれいになってしまふ。秘密があるのかと思うほどだった。しかも濯いだ水もちゃんとバケツに入れて、ズックや下駄を洗い、最後に裏の敷石をたわしでこすりながら洗って、すっかり使い切った。風呂の湯は洗濯に使う。洗濯機になってもバケツで汲んで使って使った。もちろん米のとぎ汁などそのまま流すことはない。バケツに入れて庭の植木の根元に撒いたり、雑巾がけに使ったりした。

私も水では散々苦勞したので、水は大切にする方だが、母にはかなわない。母は最後までシャワーで洗髪することはなかった。「シャワーは水をたくさん使う」といって洗面器で、頭を突っ込むようにして洗っていた。あの時代の人々の水の節約は半端ではない。節約ということが身体に刷り込まれていたのであらう。



明治末、水道が引けて便利に改造した台所
(『婦人友』明治43年)

□ 小泉 和子 (こいずみ・かずこ)

生活史研究家、「昭和のくらし博物館」館長(有)小泉和子生活史研究所代表取締役、家具道具室内史学会会長。工学博士。1933年東京都生まれ。女子美術大学芸術学部洋画科卒業。東京大学工学部建築学科建築史研究室で日本家具・室内意匠史を研究。その後も、家具・道具および建築を中心として生活史を研究。重要文化財建造物の家具・インテリアの復元および博物館・資料館の展示企画などを行う。近著は、『西洋家具ものがたり』、『昭和のキモノ』、『昭和すぐれもの図鑑』(以上河出書房新社)、『家で病気を治した時代』、『日本の住宅』という実験(以上、農山漁村文化協会)など。